

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	大分県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	大分市立大分西中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	4	5	1	15	34
生徒数	163	160	191	2	516	

研究の概要

1. 研究主題

基礎学力の定着を図る指導方法及び指導体制の工夫・改善
----------------------------

2. 研究内容与方法

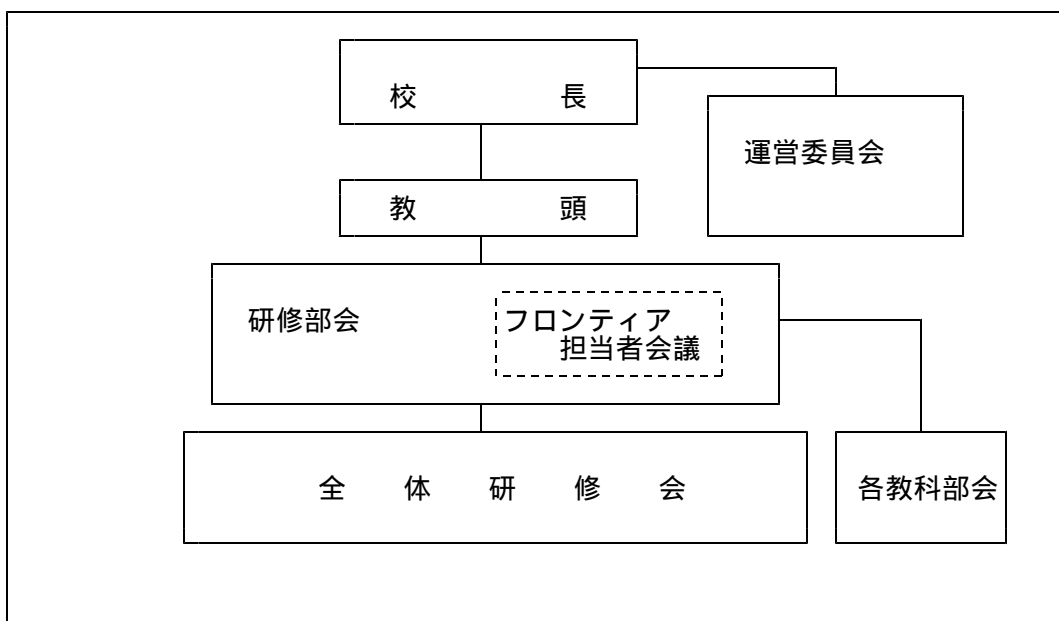
(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3年生・数学 各学級を生徒の希望により基礎充実と深化発展の2つのコースに分け習熟度別少人数指導を行う  大分市基礎学力向上研究推進校委託事業により、学校として当該教科に関する研究実績があるため</li> <li>・ 全学年・英語 1年生は生徒の希望により、3学級を4グループに分け、残りの2学級を3グループに分ける。それぞれのグループの中で1グループをアドバンスコース(発展)残りベーシックコース(基礎)として習熟度別少人数指導を行う。3年生は、生徒の希望により各学級をアドバンス・ベーシックの2コースに分け習熟度別少人数指導を行う。3年生は、週3時間のうち1時間をチームティーチングによる指導の時間とする。  生徒の理解の状況に差が出やすい教科であり、学校として当該教科に関する研究実績があるため</li> <li>・ 1・2年生・理科 1年生は週3時間のうちの1時間、2年生は週3時間の全てで、実験観察をともなう指導内容についてはチームティーチングによる指導を行う。それ以外の指導内容については少人数指導を行う。  これまでの研究成果から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため</li> </ul>
--

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年度	<p>研究テーマ 基礎学力の定着を図る指導方法及び指導体制の工夫・改善</p> <p>研究の見通し 本校では、一昨年度から数学科・昨年度からは英語科において少人数指導が実施されており、基礎・基本の定着を図るための取組が2つの教科において進められてきた。また、今年度からは理科においても教員が加配され取り組みをはじめた。 そこで、今年度はこの3教科を中心として、生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導方法・指導体制の工夫改善をしながら基礎的・基本的学習内容を指導していけば、生徒の基礎学力の定着が期待されるとともに、学びの過程を習得することができ、確かな学力の向上へとつなげることができるであろうと考え研究に取り組むこととした。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・研究内容</li><li>(1)各教科における基礎学力のとらえ方と基礎的・基本的学習内容の確認</li><li>(2)各教科における基礎学力を定着させるための指導方法及び指導体制の工夫・改善点の検討</li><li>(3)各教科における基礎学力を定着させるための評価方法の検討</li><li>・研究方法</li><li>(1)全体研では、資料・情報の交換を行い、研究仮説、研究内容、研究方法などの共通理解を図る。また、各教科の経過や問題点などを出し合い全職員の共通理解を図る。</li><li>(2)教科研では、基礎的・基本的学習内容の確認、指導方法及び指導体制の工夫改善、評価方法の検討を行う。</li><li>(3)授業実践を通して、全体で仮説の検証を行う。</li></ul>
平成 16 年度	<p>研究テーマ 基礎学力の定着を図る指導方法及び指導体制の工夫改善</p> <p>研究の見通し 平成15年度は数学・英語・理科の3教科を中心に個に応じたきめ細かな指導のあり方について研究を進めてきたが、平成16年度はこの取り組みを3教科以外にも広げ、各教科において、生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導方法・指導体制の工夫改善をしながら基礎的・基本的学習内容を指導していけば、生徒の基礎学力の定着が期待されるとともに、学びの過程を習得することができ、確かな学力の向上へとつなげることができるであろうと考える。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・研究内容</li><li>(1)各教科における基礎学力を定着させるための指導方法及び指導体制の工夫、改善点の検討</li><li>(2)各教科における基礎学力を定着させるための評価方法の検討</li><li>・研究方法</li><li>(1)全体研では、資料・情報の交換を行い研究内容、研究方法などの共通理解を図る。また、各教科の経過や問題点などを出し合い全職員の共通理解を図る。</li><li>(2)教科研では、指導方法及び指導体制の工夫改善、評価方法の検討を行う。</li><li>(3)授業実践を通して、全体で仮説の検証を行う。</li></ul>

### (3) 研究推進体制



#### 平成15年度の研究成果及び今後の課題

##### 1. 研究成果

###### きめ細かな指導について

少人数指導は、一人ひとりの生徒にかかわる時間が長くなり、生徒の実態を把握しやすく個に対する理解が深まり、それぞれに適切な指導が可能となる。また、習熟度別の編成では「みんなが同じ位のスピードで進んでいるので、自分のペースでゆっくり考えられる。先生もより多く机間指導してくれるので、質問しやすく授業が楽しくなった」などの感想を多くの生徒が持っている。さらに、深化発展コースでも「より多くの発展問題を解くことができ、今の授業がいい」と多くの生徒が答えている。教師の側でも習熟度別編成のとき、生徒の理解や到達の度合いがみえやすく把握しやすいという利点がある。

###### 教師の共通理解について

各コースの学習活動の共通理解のために教科部会の時間を確保し、授業の進み具合の調整・発展問題の検証などを行った。また、毎時間の状況を指導記録簿に記入し、各コースでの工夫した点や授業から生まれた問題点を記録した。教科によっては授業案を交代で作成したり補助教材の開発など、協力しながらお互いの指導方法について、意見を交換することによりそれぞれの教員の資質が向上してきた。

###### 評価について

評価は、単元ごとに各コースで行うようにした。教科部会で授業中に評価する観点の打ち合わせをし、ノート・プリントを観察し補助簿にまとめ評価に役立っている。これをもとに学年末には評定をどのように行うかを共通理解した。

## 2. 今後の課題

### きめ細かな指導について

少人数指導を多く取り入れていくほど、指導する教師の持ち時間数が多くなり教材研究に時間がかかるなど負担も大きくなる。また、複数の学年にまたがって指導しているので教科部会の時間の確保ができにくいことや出張などで授業のずれがでてきたときに調整がしにくいことが課題としてあげられる。

また、生徒の希望による少人数の集団を編成する時、生徒の人間関係に配慮することが必要となる。その学年の生徒のことを良く知っている教員が中心となり生徒の実態に合わせた継続的な研究をすることが不可欠であるとする。

習熟度別の少人数編成をする場合、発展的な学習内容の設定についても今後の課題として検討する必要がある。

### 評価について

少人数指導にしてもチームティーチングによる指導にしても、複数の教員によって評価することになり、具体的な評価基準の設定が今後の課題となる。特にチームティーチングにおいては、指導者によって評価に少しずつ違いが生じてくるので、2人で分担を決めきまったグループを指導・評価していき、数時間の後に担当グループを交代するなどの工夫が今後必要と考えられる。

また、習熟度別少人数指導の場合、発展コースでは発展問題を個人内評価して教育相談や通知表の所見などで活用してもらうよう個人内評価の充実・研究を進める必要がある。今後は、生徒が自分自身の伸びを自覚し、さらに意欲的に学習に取り組んでいけるような自己評価の工夫にも取り組んでいきたいと考える。

## 学力把握のための学校としての取組

単元ごとのプレテストやポストテスト・評価問題（単元ごとに実施）

定期テスト（年間4回）

## フロンティアスクールとしての研究成果の普及

### 公開研究発表会

開催日時 平成15年10月27日（月）

場所 大分市立大分西中学校

対象 県内中学校教員（参加者 113名）

会の目的 研究成果の普及

「教育おおいた」（大分県教育委員会）No. 346 掲載

「教育の広場」（大分市教育委員会）No. 113 掲載

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校
- 【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上
- 【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他
- 【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無